(7)　コーチングを伴うコンサルテーションが自閉症支援者の構造化実践に与える影響

医療福祉学研究科医療福祉学専攻修士課程　　○高橋　大地
医療福祉学研究科医療福祉学専攻　　諏訪　利明

【目的】

コーチングを用いたコンサルテーションが，支援者の自閉症理解に基づく構造化実践にどのように影響するのかを検討する．

【方法】

対象者は，成人の生活介護事業所に勤務している自閉症支援者1名である．自閉症トレーニングセミナーを既に受講していた．7回のコンサルテーションの前後で構造化実践の度合いの変化をみるためにTEACCH Fidelity Checkと，コーチングによる対象者の主導的な自己成長や変化への意識を見るために，PGIS Ⅱを実施した．

TEACCH Fidelity CheckとPGIS Ⅱの結果を比較して変化をまとめ，対象者のコンサルテーション中の発言ややりとりの文脈を内容分析した．

【結果】

TEACCH Fidelity Checkの結果は，完全に実施できている自己チェックが増加し，対象者が行う構造化の実践が促進された．そしてPGIS Ⅱの結果は，全ての得点が向上し，対象者の主導的な自己成長に向けた意識の変化が見られた．

【考察】

構造化実践はより支援対象者に合ったものに変化し，支援者自身もより自立的に支援を実施できるようになった，と考えられる．支援者の発言を初回時と最終回時で比較してみると，コーチングのオープンクエスチョンに対し，最初十分ではない返答が，最後には利用者に対する影響を整理し，今後の支援の展開まで説明できることが多くみられた．また，支援対象者のアセスメントを深めていくことが見られた．

対象者の内的変化として「同僚や上司に助けを求められるようになったこと」が大きかったが，対象者は「自分の中で何をするのかを整理できたため，わかりやすく説明ができ，助けを求められた」とコメントしている．また「なぜ？と聞かれることが常に頭に入っていて，自分でもそれを先に考えるようになった」とし，「自分自身で段階を踏んで説明をしていくことで自分がこう考えているんだという理解につながった」ことは，繰り返し問われることが，自身の考えを整理することや新たな気づきを促進することに影響していたと考えられる．